雪子ゆかりの物語

辻　憲男（文学部教授）

谷崎潤一郎は、戦争中も『細雪』の原稿を書きついだ。時局に合わないという理由で、出版はできなかった。小説は蒔岡家の姉妹の織り成す四季折々の物語絵巻。ヒロイン雪子のお見合いの話を縦糸に、戦前の神戸・阪神間の裕福な家庭人の心模様が美しくもなまなましくも描き出される。

幸子夫婦の家に妹二人は同居していた。丸顔ではっきりした目鼻立ちの、かっちりした体格の妙子は洋服を着た。細面の、なよなよとした痩せ形の雪子は着物の趣味。その両方の長所を取って一つにしたような幸子は、夏は洋服、他の季節は着物といったふう。秋晴れの音楽会の日、三人そろって着飾って阪急電車の駅まで来ると、居合わせた人々はみな振り返って眼をそばだてた。

「松の樹の多い空気の匂いを嗅ぎ、六甲方面の山々を望み、澄んだ空を仰ぐだけでも、阪神間ほど住み心地のよい和やかな土地はないように感じる」。「雪子はたまに上本町の本家へ帰って四五日もいてから戻って来ると、生れ変ったように気分がせいせいするのであった」。

谷崎自身たいそう気に入っていたこの土地が、突如牙（きば）をむいたのが昭和13年（1938）7月の阪神大水害。あちこちで山津波が起こり、町は泥海に埋もれた。69年前の災害はもう記憶のかなたにあるけれど、死者481、行方不明76、重傷322、家屋流失1955、全壊4039は今でも驚くべき数字だ。『細雪』中巻の住吉川の洪水の描写は、その惨状の貴重なドキュメントとして読める。

灘目の水車（復元）。白鶴美術館から阪急御影へ向かう道にある。